

フィンランドの音楽教育 II

—小学校音楽科教材に関する考察 3—

田 原 昌 子

はじめに

筆者は、2004年以来、教育大国として世界が注目するフィンランドの幼稚園、小学校、中学校の音楽教育現場の視察を重ね、フィンランドの音楽教育に着目することにより、日本の音楽教育の抱える多様な問題に有効な解決の糸口を見出すことを目的として、研究を継続している。

本稿に先立つ3つの論文¹⁾では、日本の学習指導要領に相当するフィンランドのナショナル・コア・カリキュラム²⁾の第1－4学年の指導目標・主たる指導内容を、同学年の日本の学習指導要領の内容との比較や、音楽科教科書分析を通し、フィンランドの音楽科教育の特色を検証・考察を行った。

本研究では、先行研究に引き続き、次の2点からフィンランドの音楽科教育を分析し、その特色をさらに検証・考察する。

まず、ナショナル・コア・カリキュラムから、9年間に亘る義務教育である基礎教育³⁾の音楽科学習が、第1－4学年から第5－9学年へといかに展開されていくかを検証し、フィンランドの基礎教育における音楽科教育の目指すところを考察する。

さらに、基礎教育の前期・後期を繋ぐ第5－6学年の音楽科学習内容を、教育現場での使用頻度が高い代表的な音楽科教科書の内容の分析を通して、その特色を探求する。

I. 基礎教育のナショナル・コア・カリキュラム

国家教育委員会によって編纂されたナショナル・コア・カリキュラムは、その内容を基に、様々な教育関係者や一般の市民までもが参加して、各地方独自のカリキュラムが編成される。さらに各学校の特色や教師たちの工夫を加え、実践に即したカリキュラムの下で現場の教育が進められる。したがって、授業現場で実際に授業が進められるカリキュラムは、国家教育委員会が編纂したナショナル・コア・カリキュラムより、地域や子どもたちの実態に即した柔軟性のあるものに

なっている。

また、9年間の基礎教育は、日本の小学校に相当する前期6年間はクラスの担任が全教科を、中学校に相当する後期3年間は教科担任が指導する。基礎教育音楽科のナショナル・コア・カリキュラムは、第1－4学年と第5－9学年の2つの学年群に大別して記述されており、その内容（筆者翻訳）は表1として、文末に掲載している。

この2つの学年群に大別されたナショナル・コア・カリキュラムの内容を、＜学年群の前文＞⁴⁾、＜指導の目標＞、＜主たる指導内容＞、＜到達目標＞の4つの観点で分析し、各々の内容が、第1－4学年から第5－9学年へといかに関連・発展しているかを検証する。

1-1 ＜学年群の前文＞について

表2に示すように、第1－4学年では音楽体験を通して自己表現することを促し、第5－9学年では音楽経験を分析して、音楽の大まかな意味内容の理解や楽譜を活用することが書かれている。

表2 各学年群の前文

第1-4学年	第5-9学年
<ul style="list-style-type: none"> ・楽しく、総合的な音楽活動の展開 ・音楽表現力の開発 ・音楽経験による自己表現、自己の考えの実体化 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の世界と経験の分析 ・音楽を聴く、演奏する ・音楽の概念、楽譜の活用

9年間の基礎教育で、表現を通しての自己実現が求められているが、さらに音楽活動を通して音楽の分析・鑑賞へ、さらには音楽の概念育成や表現のための音楽理解、すなわち表出から内観へと高度な学びへの道筋が示されている。

1-2 ＜指導の目標＞について

表3に示すように、第1－9学年を通した共通の指導目標は、音楽を形づくっている要素を使って作曲・音づくりをすることと、音楽の世界の多様性、すなわち音楽の様々なジャンルやスタイルについて知識を持つことが挙げられる。

表3 各学年群の指導の目標

指導の目標 第1-4 学年				指導の目標 第5-9 学年			
表現	歌唱	無理なく活用して表現する。	個人・集団で表現する。	表現・態度	個人・小さなグループで演奏するなかで、様々な音楽表現領域における能力を維持・向上させる。		
	器楽	(具体的な記述はない)			音楽を形づくっている要素を表現するという意味・内容を理解し、楽譜を活用する。		
	身体表現	(具体的な記述はない)		鑑賞	様々な音環境を批判的に検討・評価する。		
	作曲	音楽を形づくる要素を使用する。			様々な音楽のジャンルやスタイルに関する知識を深める。		
鑑賞	鑑賞	音環境と音楽を集中して積極的に、理解しようと聴く。		音楽理解	音楽の形式における音楽を形づくっている要素の役割を理解する。		
音楽理解	音楽の世界の多様性を理解する。						
態度	音楽をつくるグループの一員として、音楽の聴き手として、責任を持って行動する。						

音楽には、なぜ、その音楽を形づくっている要素が必要であるのか、換言すれば、自分が演奏しようとする音楽のリズムや強弱は何を表し、調性や和音の響きがいかなる世界観や音楽観を表そうとしているのかを考え、楽譜から学ぶことが自己表現に不可欠であることはいうまでもない。

また、グローバルな観点で音楽を学ぶことは、世界の様々な音楽・文化を知るだけではなく、自国の音楽・文化に関する見地を深め、自国の理解を深めることに繋がる。世界という地域に関する観点だけではなく、自国を含む世界の国々の老若男女が、太古から現代まで関わる様々なジャンルの音楽を学ぶことは、国際社会を生きる人の育成に欠くことができず、基礎教育を通じての指導の目標になっている。

第1－4学年では、表現を、歌唱、器楽演奏、身体表現を通して、一人で、または集団で学んだり、創作や鑑賞においてグループの一員として行動したり、音楽の指導を通して社会性を身に付けることが指導の目標に入れている。子どもたちが音楽で自分を表現することを学ぶだけでなく、個人や集団の中でどのように自分が行動をしなければいけないかという社会性を培うことが、重要な項目と考えられている。

第5－9学年では、自己の音楽的能力を向上させようとする態度で学ぶことが、全ての音楽活動と関連づけられている。また、リズム、旋律、和音、強弱、調性や音楽形式という音楽の要素を知識として理解することが、自己の音楽表現に密接に結びついているため、指導の目標となっている。

さらに、子どもたちが身を置く音環境、すなわち音楽を聴いたり演奏したりする環境に対して、ただその環境に身を置くだけでなく、自分の考えや意見を持ち、表現の裏付けを明確にして積極的に関わり、自分の考えや意見、感想などを言葉で表現するということが目標に示されているように、音環境を通して各自のアイデンティティを確立することも、第5－9学年の指導の目標となっている。

音楽科の指導の目標は、社会性を育み、集団の中の一員として自己を確立することから知識や音楽の概念を確立して自己表現する、すなわち、言葉や音楽を通して自己表現できる人の育成へと、より全人教育を目指していると考えられる。

1-3 <主たる指導内容>について

2つの学年群の指導内容を、歌唱・器楽・鑑賞・作曲の4つの活動と、これらの活動の共通事項に分けて、表4にまとめた。

表4から、第1－4学年に挙げられている共通事項の項目が、第5－9学年の指導内容には挙げられていないことがわかる。これは、共通事項として特記するまでもなく、すべての音楽活動を通して指導される内容であり、指導内容として取り上げる必要はないという見地から記述がないと考えられるが、この項目の設定がない点は疑問の残るところである。

表4 各学年群の主たる指導内容

主たる指導内容 第1-4 学年		主たる指導内容 第5-9 学年	
歌唱	発話や言語遊びといった発達段階に応じた歌唱ゲームや歌唱をする。	歌唱	発声をコントロールし、表現の工夫をする。
	声部に分かれた歌唱をする。		様々な形態やジャンルの独唱や斉唱曲を、一部暗譜で歌唱する。
器楽	身体を使った楽器・リズム楽器、旋律楽器や和音楽器の演奏、さらに独奏だけでなく合奏できるための準備をする。	器楽	合奏するスキルを向上させる。
	基本的なリズム感をつける。		様々な形態や音楽文化を代表する器楽曲を演奏する。
鑑賞	色々な音楽を各自の経験や思いを活発にして聴き、それを説明する。	鑑賞	多様な音楽を聴き、それらの時代や地域の特徴や文化を分析する。
作曲	音の反復や小品を作曲する、或いは即興による作曲をする。	作曲	音や歌唱曲、楽器や身体反応、音楽のスキルを活用して、即興、または作曲や編曲を通して各自の思いや考えを表してみる。
共通事項	各自で、また、グループで音楽活動を通して音楽を形づくっている要素の基本的な知識を得る。 歌唱・器楽・鑑賞の曲は異なった時代やジャンルの曲を網羅し、フィンランドの音楽や他国の音楽文化を取り入れる。		

第1－4学年群では、各音楽活動で何を指導するのか、その内容の記述が、第5－9学年群の記述に比べて具体性がある。小学校第5－9学年の指導内容は、表記こそ簡素化されているが、より高次なものであり、基礎学校の前期から後期へと学びを継承し、より昇華された音楽活動を獲得する指導内容へと展開されている。

第5－9学年群では、第1－4学年群には鑑賞と共通事項の活動で取り上げられている、多様な音楽の世界の経験を持つ指導が、作曲以外の表現活動において取り上げられている。これは、音楽の世界の多様性を学ぶことが＜指導の目標＞として挙げられていたことから、指導の内容として重視されているためであると考えられる。

さらに第5－9学年の指導では、音楽活動、鑑賞の体験や音楽的な知識の獲得が、作曲という表現活動で総合的な指導として挙げられている。言葉や音楽を通して自己表現できる人を育成するには、その個々の子どもたちの音楽的な技術の有無が如実に表れる、歌唱や器楽の表現ではなく、指導で得た音楽的な知識や経験、さらには個々の子どもの感性を用いて音づくりをする活動である作曲が、音楽科の総合的な表現活動として指導の内容として考えられているのではないだろうか。

1-4 ＜各学年の到達目標＞について

基礎教育音楽科のナショナル・コア・カリキュラムのなかで、＜達成が好ましい音楽活動＞と＜成績8を獲得するための最終評価基準＞の項目は、日本の学習指導要領には見られない項目であり、＜学年群の前文＞、＜指導の目標＞、＜指導内容＞に書かれた内容が具体化された目標であり、フィンランドの音楽科教育がめざすものといえる。

フィンランドの小学校では、一般的に点数評価をせず、子どもたちに何ができるようになったかを、教師が文章で記述して評価している。第1－4学年では、表5の6項目を基に個々の子どもたちが、どのような活動ができるようになったかが記述される。基礎教育終了時に、4～10の数値を用いて子どもたちの到達度を表5にある8項目で評価をし、点数化された評価「8」（良い）のレ

ベルに到達することを国家教育委員会は期待している。

表5は、ナショナル・コア・カリキュラムの＜達成が好ましい音楽活動＞と＜成績8を獲得するための最終評価基準＞の原文訳と、それぞれの項目がいかなる内容について書かれているのかを筆者の観点でまとめ、（ ）で書きこんだ表である。

表5 各学年群の到達目標

4年生終了時に達成が好ましい活動
<ul style="list-style-type: none"> *発声方法がわかっていて、声を合わせて歌唱できる。(歌唱、社会性) *楽曲の基本的なリズムをとることが出来て、器楽演奏に参加でき、一緒に演奏できる。(器楽、社会性) *歌唱曲を習熟し、暗唱できる楽曲もある。(歌唱) *個人として、集団の一員として、独自の音楽的な解(musical solutions)―例えば、繰り返し(in echo)、問いと答え、ソロもしくはトゥッティでの練習、音を使う、身体反応、リズムもしくは旋律を発見する方法がわかっている。(音楽を形づけている要素の理解、音楽表現方法の理解、社会性) *耳から入ってくる音楽を認識し、音楽を聴いた経験を、言葉、イメージもしくは身体反応で表現できる。(鑑賞と音楽表現、自己表現) *音楽を作るグループの一員として、当該グループの他のメンバーのことを助案しながら、どのように行動すべきかをわかっている。(音楽への意欲と参加意識、社会性)
成績8を獲得するための最終評価基準
<ul style="list-style-type: none"> *合唱に参加し、主旋律を追い、正しいリズムでの歌唱方法をわかっている。(歌唱) *個人として、リズム楽器、旋律楽器、もしくは、和声楽器を演奏する基本的なテクニックを習熟し、重奏ができる。(器楽) *音楽の聴き方と鑑賞方法がわかっており、聴いた音楽について、妥当な意見を表明する。(鑑賞、自己表現、社会性) *自らの音楽及び他者が制作した音楽双方を聴く方法を知っている。この結果、他者と一緒に音楽を作ることが出来る。(鑑賞、社会性、創造性、社会性) *異なったジャンルの音楽及び異なった時代や文化の音楽を認識し、差別化ができる。(多様な音楽の理解) *最も重要なフィンランドの音楽及び音楽生活を知っている。(自国の音楽の理解) *音楽を作り、音楽を聴く際に、どのようにして音楽概念を活用するかがわかっている。(作曲、鑑賞、音楽理解の表現) *自らの音楽の発想及び考え方を開発・実現するにあたり、音楽を形づけている要素を構成要素としてどのように活用するかがわかっている。(自己表現と音楽を形づけている要素の理解)

第1－4学年では、音楽をそのまま体験として表現したり聴いたりするだけでなく、その音を認識して、イメージ、言葉、身体反応で表現することを目標としている。それに対し第5－9学年では、音楽に関わる姿勢、すなわち生涯の音楽との付き合う方法や音楽に対する概念をいかに活用するかという、音楽に対するフィンランド国民としてアイデンティティを育成することを音楽科の到達目標としている点が、大きな特徴といえる。

また、両学年群において、音楽を通して自己確立と、集団の中での自分の役割を理解してその状況にあった自分の行動を学び、さらに第5－9学年では、自国の音楽を理解するだけでなく、音楽を通して世界や歴史を学び、フィンランド国民としての全人教育(Growth as a person)、文化的アイデンティティと国際性(Cultural identity and internationalism)の確立を、音楽教育の到達目標としていることが読み取れる。

これは、2004年度に公示されたナショナル・コア・カリキュラムの改訂にある、クロス・カリキュラムの内容であるといえる。この内容は、すべての教科を跨いで設定された学習項目として「全人教育(Growth as a person)、文化的アイデンティティと国際性(Cultural identity and internationalism)、メディア・スキルとコミュニケーション(Media skills and communication)、市民としての参加意識と起業家精神(Participatory citizenship and entrepreneurship)、環境・

福祉・持続可能な未来に対する責任（Responsibility of the environment, well-being, and a sustainable future）、安全と交通（Safety and traffic）、技術と個人（Technology and the individual）」の7項目からなっている。

すなわち、一つの学びが様々な学びに関連し、社会性を学びながら自己確立をして自立した人間の育成を目指す音楽科教育においても、前期・後期の基礎教育の学習内容に連続性をもたせた、教科を跨ぐ「クロス・カリキュラム」を実現することが、音楽科教育の到達目標として表されているといえる。

Ⅱ. フィンランドの小学校第5－6学年音楽科教科書

ナショナル・コア・カリキュラムで、小学校第1－9学年の音楽科の目標・内容を検討したが、小学校教育と中学校教育を繋ぐ小学校第5－6学年音楽科教科書の内容は、いかなるものであろうか。教育現場で用いられる機会が多く、先行研究の分析で扱った『MUSIIKIN mestarit 1－2』OTAVA社、『MUSIIKIN mestarit 3－4』OTAVA社（2009）に続き、『MUSIIKIN mestarit 5－6』OTAVA社（2009）の内容について分析し、音楽科教科書の内容を通して見られるフィンランドの小学校第5－6学年音楽科学習の特色を考察する。

2-1 『MUSIIKIN mestarit 5-6』の目次と構成

『MUSIIKIN mestarit 5－6』は、280ページで構成されている。この教科書では、ある一人の少年が「やあ、一緒に旅に出よう」と呼びかけ、音楽の旅を進め、10の単元で内容が展開されている。目次にかかれた各単元名と単元の見出しを翻訳し、文末の表6に掲載した。

2-2 各単元の学習内容

『MUSIIKIN mestarit 5－6』の各単元の内容を、先行研究の『MUSIIKIN mestarit 1－2』『MUSIIKIN mestarit 3－4』の方法と同様に、歌唱・器楽・作曲（音づくり）という表現領域の項目と、音色・リズム・速度・旋律・強弱・音の重なり・音階や調・拍の流れやフレーズなどの、音楽を特徴づけている要素の項目に、音楽史や民族音楽を含む多様な音楽、音楽理論の項目を加え、表8から表17にまとめた。

さらに、先行研究で分析した第1－2学年、第3－4学年の教科書には記載がなかった＜Tee mestaritest! 達人のテストをこなさい＞という自己チェック項目が、目次の前に挙げられており、その部分についても内容を吟味した。

<Tee mestaritesti! 達人のテストをなさい>

表7に挙げた8つのチェック項目は、教科書の4人の著者から子どもたちへ、音楽の世界への誘いという目的で書かれたものである。子どもたちにとって極めて身近な音楽体験から作曲したり、ステージで演奏したりする自分の姿を頭に描いてみるというイメージの世界での音楽体験までが、項目として挙げられている。

第4学年までの音楽体験で、子どもたちにとって音楽がより身近になり、演奏や作曲で自分を表現するだけでなく、人との関わりの中で音楽表現をするという、高次の表現活動へと展開されるチェック項目になっている。

また、フィンランドの若者音楽文化の象徴といえるロック音楽の経験を項目として挙げていることは、音楽が小学校高学年や中学生の子どもたちにとって、より身近であることを示唆し、音楽に対する興味・関心を高める呼び水となっているといえる。

表7 自己チェック項目

<ul style="list-style-type: none"> ・あなたは一人で、または友だちと一緒に音楽を聴いたことがありますか。 ・音楽を聴きながら即興演奏をしたことがありますか。 ・忘れることのできないロックのソロをエアギターで演奏したことがありますか。 ・机の角で伴奏をしたことがありますか。 ・風呂の中で、大声で歌ったことがありますか。 ・ステージで演奏する夢をみたことがありますか。 ・自分の曲を作曲するのを空想したことがありますか。 ・音楽関係で成功することの喜びを経験したことがありますか。 <p>もし、1つでもチェック項目があれば、あなたの中には音楽の達人が住んでいます。 それを前面にだしましょう!!</p>

単元1 <HYVIÄ FIILIKSIÄ いい気分> 表8

歌唱	器楽	リズム	音づくり	音の重なり
身体表現を伴った歌唱が中心である。	リズム楽器として、アゴゴベル、カウベル・トライアングル・カバサ・タンブリン・ジェンベ、ボンゴ・コンガ・フレイムドラム、マラカス、シェーカー、ギロ、クラベス、ウッドブロックが紹介されている。	身体全体を使ったリズム表現を歌唱とともに表現したり、リズム楽器で合奏したりする。	自分のラップを創り、作する。	リズム演奏に和音伴奏を付加したり、また、旋律に付け加える声部として2重唱になる部分が記されている。

単元2 <OMILLA JUURILLA あなたのルーツ> 表9

歌唱	器楽
ラップランド地方のサーメの人々が歌うヨイクという伝統的な歌唱法が紹介されている。伴奏楽器として太鼓やタンブリン、言葉の伴奏が挙げられている。	羊飼いの笛や樺の木皮のホルン、角笛、振って音を出すバラ、口琴、ヨウヒコという弦楽器など、フィンランドの古い楽器の紹介がされている。

音づくり			
楽器づくり	歌づくり	呪文づくり	作曲
昔は身近にある材料で音を出すことを発明していたので、身の回りにある物から楽器を創作し、音が出るか試してみる。	カレワラの旋律で一日の学校生活についての歌を作って歌ってみよう!に書かれている。	呪文についての解説があり、呪文の魔術的な雰囲気を見つけ出し、自分の呪文をつくってみる。	「ヴァイオリンを弾く粉屋の息子」の童話を読んで、どのような音の要素が童話に含まれているか、少年のテーマ、水の精の娘のテーマ、水車小屋のテーマをどの場面でもどんな楽器を用いて作曲するか、具体的な旋律を作曲をするのではなく、考えてみる。

多様な音楽	
民謡	民族音楽
民謡とはどのような音楽であるか、特にフィンランドのカレワラの詩の旋律は古い民謡であることや、それらの旋律は仕事の合間に日々の出来事についてやカレワラの主人公について語られた旋律である。	民族音楽とはどのような音楽であるか、特に、演奏された伝統的な音楽は「農民音楽」といわれ、「農民楽士」によって演奏されたこと、フィンランドの伝統的な農民楽器として、ヴァイオリン、リードオルガン、コントラバス、アコーディオン、クラリネット、マンドリンがある。

単元3 <MATKAMUISTOJA 旅行の思い出> 表10

多様な音楽・ヨーロッパの国々			
掲載されている曲	器楽	リズム	ダンス
エストニア、ロシア、東欧のユダヤ人の民族音楽、ハンガリー・ギリシヤ、スコットランド、アイルランド、イタリア、スペイン、ギリシヤ、トルコ、アラビアの曲	バグパイプ(スコットランド)、パウロン(アイルランド)、トルコで人気のダラブカが紹介され、リズム伴奏の譜例に担当楽器として挙げられている。	掲載されている各国の音楽に、単元1で取り上げられた楽器や紹介した民族楽器を使って、また、手のひらや手の甲を用いた手拍子でリズムを伴奏をする譜例が掲載されている。	アイルランドのリヴァーダンス、スペインのフラメンコを髣髴させる足のステップや手拍子が挙げられている。

多様な音楽・アジアの国々		多様な音楽・アフリカの国々			
掲載曲	リズム	掲載曲	歌唱	器楽	リズム
シベリア、韓国、日本の曲	曲の低音を支える低音のドラムやベースでリズムを刻んだり、木琴や鉄琴などで和音を響かせながらリズムを刻む譜例が示されている。	セネガルやタンザニアの曲	単旋律だけでなく、対旋律、歌詞のついたリズムパートなど、和音の響きとしてだけではなく、声の掛け合い、またはリズムを口で刻むなどの声を使った様々な形の曲が挙げられている。	ジェンベの、または代替物として身近にあるバケツを使用しての、手やスティックを使った奏法の紹介と練習が取り上げられている。	ジェンベでリズムをとりながら、または、フィンランド語の言葉のリズムを使ってリズムをとりながら演奏する。

多様な音楽・カリブ海と南アメリカの国々			
掲載されている曲	器楽	リズム	ダンス
キューバのダンス音楽「ソン」、ジャマイカの「レゲエ」、ブラジルのダンス音楽「サンバ」と各国の踊りの曲が歌やリズム伴奏譜とともに掲載されている。	今までに紹介された様々な打楽器がリズム伴奏楽器として挙げられている。	サルサに欠かせないカスカラのリズムは、打楽器で演奏する難しいリズムであり、フィンランド語の言葉のリズムが充てられている。	ソン、レインボーダンス、サンバの曲を歌いながら、リズム楽器でリズムをとりながら踊る。

単元4 <RADIO SOIラジオが鳴り響く> 表11

リズムと身体表現	音づくりと身体表現	ダンス	音づくり	多様な音楽
スナップ、手拍子、胸打ち、前腿打ち、横腿打ち、ステップのそれぞれの動きを5線譜に表し、それを、実際に様々な身体リズムで表してみる。また、その身体リズムを使用して、様々な曲を歌う、聴く時にリズムに合わせて身体表現をする。	自分の4分の4拍子のリズムを創作し、それを身体表現する。	社交ダンスとジャズのミックスしたHumpalいう踊りや、ワルツやフォックストロット等の社交ダンスのステップのリズムパターンが示されている。	クラスのための、自分の応援歌、掛け声を作る。	フィンランドで流行しているロック音楽が挙げられている。

単元5 <AIKOJEN TAKAA 遠い昔から> 表12

多様な音楽・音楽史			
石器時代～古代ギリシヤ	中世	ルネッサンス	バロック
石器時代の昔から音楽はあり、音楽、詩作、踊りなどを意味するギリシヤ語のmousikeという言葉に由来する。	教会音楽と世俗音楽についての解説がされ、通奏伴奏音やリズムが楽曲と一緒に提示されている。	再生を意味するルネッサンスについて、また多声化された歌唱や世俗的な音楽における器楽選択の多面化、新しい管弦楽器やリコーダーの誕生や器楽曲が作曲されたことが解説されている。	バロックを代表する音楽家としてヘンデルの伝記・作品が挙げられている。その他の代表的な音楽家としてヴィヴァルディ、JSバッハの名前が挙げられている。

多様な音楽・音楽史			
ウィーン古典派	ロマン派	民族ロマン主義	時代区分の表記なし
可能な限り単純でバランスのとれた音楽を生み出すことを目指したウィーン古典派を代表とするモーツァルトの伝記や作品が挙げられている。	1800年代のロマン派はその時代の芸術家を魅了し、音楽にも感覚・空想・未知・超自然的なこと、センチメンタルや力強さとして影響を与えた。ピアノのショパンやヴィオリンのバグニーニ等が演奏家、作曲家としてスターであった。作品としてブラームスやエルガーの曲が挙げられている。	民間伝承や民族的な題材に興味を持ったロマン主義の代表として、フィンランドを代表とするシベリウスの伝記、「カレワ組曲」が紹介されている。	現代作曲家として、ラウタヴァーラが作曲した「北の歌」が、またサン・サーンスの「動物の謝肉祭」の『水族館』の作品が解説されている。

器楽	音づくり
中世からルネッサンスへと歌唱曲だけでなく器楽が、特にリコーダーが王宮から民衆へと発展をし、現在、学校で一般的に多く使用されているソプラノリコーダーによる対位法的な2重奏曲が挙げられている。	サン・サーンスの「動物の謝肉祭」の『水族館』を基に、自分の水族館を作曲するという指示がある。その考える方法として、「1)どこの中にするか2)水の渦巻や流をA/H/C/E/Fisを用いて表す3)先に考えた水に合った特徴的な魚を選ぶ4)魚に合った旋律を先に用いた5音を用い作曲する。5)水の流れと魚に合ったテンポの組み合わせを考える。6)練習する」という指示が挙げられている。

単元6 <LET'S ROCK さあ、ロックをやろう> 表13

多様な音楽・ロック				
ロックについて	器楽	音づくり	リズム	音の重なり
楽器のセッティング、有名なロックミュージシャンとその代表的な曲が掲載されている。	ドラム、ベース、ギター、キーボード、ギターの楽器解説と、各楽器の様々な奏法の解説、簡単な奏法のための短い練習曲が掲載されている。また、これらの楽器を使って伴奏を担当するように歌曲に伴奏形が提示されている。	ある音楽を演奏する場合、ラップやヒップホップ、ロック、ポップなどの音楽で演奏するか、それぞれのジャンルで演奏するための音づくりが示唆されている。ラップ/ビップホップでは、「言葉」と和音(伴奏)だけが必要でくり返し部分に旋律を付ける、ロックではリズムやビートを活かして旋律は自然に、また、ポップで演奏するには、旋律はシンプルでも話を「語る」という演奏をするというヒントが記述されている。	身体のリズムやドラムで様々なビートや繰り返しのリズムを演奏するためのテクニックの練習が掲載されている。	キーボードの伴奏は和音形で書かれており、その和音の転回形が示されている。

単元7 <ESIRIPPU AUKEAA 幕が開く> 表14

多様な音楽・ステージでの音楽や映画やテレビ音楽			
オペラ	ミュージカル	映画音楽	テレビ音楽
ソプラノ、アルト、テノール、バスの歌手の、それぞれの声域や声の特徴について、また、オペラとは舞台芸術でありオーケストラで伴奏がされる1600年代にイタリアで生まれたという解説が記述されている。	ミュージカルには歌やセリフ、踊りが含まれ、音楽のスタイルとして、ポップ、ロック、ヒット曲、ジャズなどが使用されるという解説があり「オペラ座の怪人」のストーリーが記述されている。	映画化されたミュージカルの「The Sound of Music」「E・T」「Spiderman」「Pink Panther」の代表的な歌が掲載されている。	テレビアニメーションで有名な「Heimurmit」のテーマ曲が記載されている。

単元8 <LAULUN TAIKAA 歌の魔法> 表15

歌唱	多様な音楽・歌唱曲
自分の声が他に類のない楽器として、「声」について、また、発声法を第一段階で身体を柔軟にして息を通すこと、第2段階で発声法を解説している。特にスポーツとの関連で、第2段階では、顔や舌の使い方、力強い声や静かな声の出し方を解説している。	単旋律の歌唱からカノン、多声部のある曲へと、またフィンランドの独立記念日である12月6日の歌や国家、クリスマスの歌、歌詞のみでメロディが書かれていないクリスマスの曲、「カレワラ」の中の登場人物の歌やなど、様々なジャンルの曲が掲載されている。

単元9 <ORKESTERI VIREESSÄ 調子を合わせたオーケストラ> 表16

楽器					
オーケストラとは	弦楽器	木管楽器	金管楽器	打楽器	その他
オーケストラの構成や概要が解説されている。また、指揮者の役割についても記述されている。さらに、弦楽合奏団、ジャズ・オーケストラ、軍楽隊、弦楽四重奏団、ジャズの構成の解説がされている。	オーケストラにおける弦楽器の役割やいかなる音が出るか、さらに具体的なヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスの楽器解説と奏法解説が記述されている。	オーケストラにおける木管楽器の役割やいかなる音が出るか、さらに具体的なフルート、オーボエ、クラリネット、ファゴットの楽器解説と奏法解説が記述されている。	オーケストラにおける金管楽器の役割やいかなる音が出るか、さらに具体的なトランペット、トロンボーン、ホルン、チューバの楽器解説と奏法解説が記述されている。	オーケストラにおける打楽器の役割やいかなる音が出るか、さらに具体的なティンパニー、チャイム、ゴング、木琴や鉄琴の楽器解説と奏法解説が記述されている。	サクソフやピッコロ、ハープやグランドピアノが紹介されている。

単元10 <MUSIIKIN AVAIMET 音楽のキーワード> 表17

楽典	楽器の奏法
音符や休符の音価、拍子、譜表と音名、半音階、音階と調性(ハ長調・イ短調・ト長調・ホ短調・ヘ長調・ニ短調・ニ長調)、調性と調子記号、音程、反復記号と演奏順序、速さとその変化に関する記号や用語・強弱に関する記号や用語	ピアノの鍵盤とコードネームによる和音の運び表、3弦だけを用了たギターの運び表、全ての弦を用了たギターのコード運び表、ベースの弦と運指、リコーダーの運指、5弦カマンチの基本和音と和音の応用

2-3 フィンランドの小学校第5-6 学年音楽科教科書の特徴

ナショナル・コア・カリキュラム＜主たる指導内容＞の4項目と、2-2でまとめた10の単元で取り扱う内容とを対応させ、対応される個所に○印を記し、以下の表18のようにまとめた。なお、同一単元においてもいくつかの＜主たる指導内容＞との対応がみられる場合には、対応する箇所全てに○印を入れ、●＊1、●＊2については、次の文中にて解説を加えた。

表18 主たる指導内容と教科書単元内容との対応

指導内容と教科書内容の対応	主たる指導内容			
	発声の制御及び表現を開発する練習：様々な形態やジャンルを代表する独唱及び合唱曲。一部、暗唱する。	器楽を重奏するスキルを開発する練習：様々な音楽文化及び形態を代表する器楽楽曲	聴く多様な楽曲及びその時代、地域性及び文化を分析	音、歌唱曲、楽器、身体反応及び音楽技術等を活用して、即興、作曲及び編曲に際して、一人一人の音楽の発想を実験する。
単元	1	○	○	○
	2	○	○	●＊1
	3	○	○	○
	4		○	○
	5	○	●＊2	○
	6	○	○	○
	7		○	
	8	○	○	○
	9	○		
	10	○		○

この結果から、歌唱に関する指導内容に対して、教科書の内容の対応が少ないように読み取れる。しかし、教科書は教師が現場で用いる教材の一つに過ぎず、先行研究で取り上げた『MUSIIKIN mestarit 1-2』『MUSIIKIN mestarit 3-4』の2冊の教科書と同様、『MUSIIKIN mestarit 5-6』も、曲集のような性格を持っており、歌唱に関する指導内容についての特記すべき記述のない曲であっても、教師が、教科書の中から歌唱指導に適すると考える曲を選択することは、当然のことである。

先行研究から、1) 他教科との強い関連をもっていること、2) 多様な文化を受け入れていること、3) 音の重なりや響きを大切にしていること、4) リズムの学習を重視していること、この4つの特徴が、今回の『MUSIIKIN mestarit 5-6』の分析からもみてとることができる。さらに2点の新たな特色も明らかになったので、次に詳しく述べる。

1) 他教科との強い関連をもっていること

『MUSIIKIN mestarit 3-4』でみられたように、『MUSIIKIN mestarit 5-6』は読み物としての要素があり、国語科との関連が非常に大きい。特に単元2（表18中●＊1）の作曲の指導で、「ヴァイオリンを弾く粉屋の息子」の童話を読んで、その登場人物や情景を作曲する内容、単元5（表18中●＊2）の音楽史に関する説明や音楽家の伝記など、全ての教科の基礎的な教育として「読解力の育成」を掲げた「ルク スオミ プロジェクト」⁵⁾の理念が、音楽科の教科書の中で取り入れられている。

また、単元5（表18中●＊2）に代表されるように、音楽史の解説には、その当時の他の文化に

触れ、さらに世界の国々の音楽や自国の伝統に関する音楽や民謡には、その地域の理解に関わる記述があり、社会科との関連が強くみられる。さらに、単元2の楽器づくりでは、身近にあるものを用い、「音」を出すための原理や作成行程について、理科や工作などの科目で学んだ経験を活かし、試しながら音をつくるという内容が取り上げられている。

このように、国語科・社会科・理科・図画工作科との関連が顕著にみられ、先に述べた「クロス・カリキュラム」のテーマが活かされた内容である。

2) 多様な文化を受け入れていること

『MUSIIKIN mestarit 3-4』で、世界の様々な地域や民族の音楽、若者の間で人気のあるラップやヒップホップ、ロックミュージックやポップ、民謡や伝統・伝承曲の取り上げがみられたことに加え、『MUSIIKIN mestarit 5-6』には、特にヨーロッパの音楽史や、各時代の代表的な作曲家の伝記や代表的な音楽が紹介され、地理的な横の広がりとしての多様な文化だけでなく、時間的な縦の広がりとしての音楽史を扱い、多様な文化の学習が音楽のジャンルからも扱われている。

また、楽器についても、アフリカのジェンベやフィンランドの伝統的な民族楽器のカンテレ、様々なドラム、エレキギター、ベース、ギター、に加え、キーボードや、オーケストラを構成する楽器などがあり、様々な世界や時代に目を向けるだけでなく、フィンランドの現代の子どもたちが関心を持つロック音楽からクラシックまでと、あらゆる音楽のジャンルに関わる器楽についての学習が取り入れられ、より広範囲のジャンルに対応できるような内容になっている。

3) 音の重なりや響きを大切にしていること

カンテレに加え、木琴・鉄琴・オルフ楽器といった音板楽器、エレクトリックギターやベース、アコースティックギター、キーボードなどが、和音、または和音の根音を演奏するための楽器として採り上げられ、その奏法が紹介されている点は、『MUSIIKIN mestarit 3-4』で挙げた特色と同じである。

さらに、『MUSIIKIN mestarit 5-6』では、主旋律に対して2声、3声の旋律を対応させたり、その対位法的な旋律にさらに和音伴奏がつけられたり、音楽の重なりも、縦、即ち和声的な音の重なりと、横、即ち対位法的な音の重なりと、音楽表現の幅がより拡大されている。また、和音による伴奏はコードネームで書かれており、メジャーコードだけでなく、セブンスコードやマイナーコード、オンコードまでもが表記され、カンテレ、ギター、キーボード伴奏で実際に演奏できるように、コード一覧表や各楽器の和音奏法について解説され、より音の重なりや響きを大切にした音楽が扱われていることが、特色として挙げられる。

4) リズムの学習を重視していること

『MUSIIKIN mestarit 3-4』で、言葉に強弱をつけて韻を踏むラップ音楽や、ジェンベやボンゴに加え、ドラムセットの楽器を演奏するための練習、身体を使ったリズム表現など、リズム学

習が重視されていた。『MUSIIKIN mestarit 5-6』では、その学習が、リズム楽器をいくつか組み合わせた、複雑なリズム伴奏による演奏へと発展している。

特に単元1で紹介されたリズム楽器に加え、単元3で紹介されている世界の音楽の中で、リズム楽器に関して、その地域の音楽の典型的リズムや基本的なリズムが記譜され、そのリズムを楽器や身体の色々な場所を叩いて表現しながら、歌を歌ったり踊ったりする身体表現活動へと展開している。

さらに、次の2点が、新しく小学校高学年の音楽教科書の特色として読み取ることができる。

5) 音づくりや作曲を通して自分のもつ音楽の発想を表すこと

単元2、単元5、単元6の音づくりに関する指導内容は、『MUSIIKIN mestarit 5-6』の内容の中で、ナショナル・コア・カリキュラムの第5-9学年の指導内容の特筆すべき点を、顕著に反映しているといえる。

その内容は、単元2では、音を出すことよりも自分がどのようなイメージを持って音楽をつくらうとするのか、また、自分の経験したことを基にして音をつくる、単元5では、具体的な音づくりの方法や使用する音が指定され、自分の考えやイメージを具体化し、音として表現するために指定された手順で音づくりがされた後、その音楽を練習して発表する、さらに単元6では、旋律をつくる作曲ではなく、語るようなシンプルな旋律に対してリズムを活かした伴奏や、和音伴奏の創作をする、である。

これらは、ナショナル・コア・カリキュラムの〈主たる指導内容〉にある、音楽・音楽表現の可能性における創造性の構築や、音楽を形づくっている様々な要素の役割を理解して作曲や音づくりで表現することが、具体的な指導の内容として挙げられていることに基づいていると考えられる。さらに、第5学年位から顕著にみられる変声期を迎えた男子にとって、音楽の授業への関心が薄れる時期に、歌唱、楽器、身体表現だけではなく、音づくりや作曲による表現活動を行うことは、音楽的能力を向上させ自己表現する方法として、有効であるといえる。

6) 一人で、またはグループで音楽表現することを通して、自分の音楽を向上させること

単元2のカンテレの練習、単元3のジェンベやその代用物によるリズム楽器でのリズムを練習、伴奏譜やリズム譜の提示による合奏や身体表現の練習という、『MUSIIKIN mestarit 3-4』にはほとんどなかった指示が記述されている。

このことは、音楽を理解し、音楽表現に必要な技術の獲得を目標とした練習を、自分一人で、または、友人たちと繰り返すことで、自分の音楽の発想やイメージをより明確に表すことができるようになることから、自分の音楽を向上させるための練習が教科書の内容に挙げられていると考えられる。

おわりに

本研究で取り組んだナショナル・コア・カリキュラムと第5－6学年の教科書分析から、先行研究で得たフィンランドの音楽科教育の特色に、新たに、次の2点が付加されることが明らかになった。

1点目は、音楽を通しての自己確立と同時に、世界や歴史を学び、フィンランド国民としての全人教育を目標としている点である。2点目は、音づくりや作曲という創作活動による音楽表現で、自分の音楽に対する考えを育み、表現のための音楽的能力の獲得を目標としている点である。

この2点が、先行研究で明らかになった第1－4学年の、他教科との強い関連をもっている、多様な文化を受け入れている、音の重なりや響きを大切にしている、リズムの学習を重視しているという4つのフィンランドの音楽教育の特色に加えられ、合計6つの特色が基礎学校における音楽科教育の特色であるといえる。

日本の小学校音楽科教育において今日的課題として、多様な音楽文化への対応や、校種間の連携、他教科と音楽科との関連、言語活動の充実と音楽科との関連等が挙げられている。⁶⁾ 今回の分析を通して、フィンランドのナショナル・コア・カリキュラム、教科書の内容の記述や教育法に、日本が直面しているこれらの今日的課題解決の糸口があるように見受けられる。今後、日本の小学校音楽科教育現場に目を向け、フィンランドから学ぶ解決の糸口がいかに実践的に有効であるか、さらなる研究を深めていきたいと考える。

謝辞 『The National Core Curriculum for Basic Education』(2004)、『MUSIKIN mestarit』のフィンランド語表記の翻訳に関し、北海道大学外国語教育センター非常勤講師水本秀明先生のご指導をいただきましたことを、感謝申し上げます。

注 (Note)

- 1) 3つの論文は、『フィンランドの音楽教育 II ―小学校音楽科教材に関する考察 1』プール学院大学研究紀要第51号 2011、『フィンランドの音楽教育 II ―小学校音楽科教材に関する考察 2』プール学院大学研究紀要第52号 2012、『我が国の音楽科教育法に関する研究 I ―フィンランドに学ぶ音楽科教育法―』プール学院大学研究紀要第53号 2012である。
- 2) 現行の『The National Core Curriculum for Basic Education』Part IV: Chapter 7.15 Music ナショナル・コア・カリキュラムは、国家教育委員会により2004年に編纂されたもので、日本の学習指導要領に相当する。
- 3) 基礎教育の第1－6学年は、日本の初等教育（小学校6年間）、第7－9学年は中等教育（中学校3年間）に相当する。
- 4) 先行研究で、ナショナル・コア・カリキュラム音楽科全体の冒頭に書かれている、標題のない記述を<前文>として扱った経緯がある。そのため、今回、学各年群の冒頭に書かれている標題のない記述を<学年群の前文>として扱った。

- 5) 2001年から2004年まで、読解力をつけるためにフィンランド政府が国策としてとった読解力育成のプログラム。
- 6) 初等科音楽教育研究会編『最新 初等科音楽教育法 [改訂版]』音楽之友社 2013では、この5点に加え、特別活動や特別支援教育との関連が挙げられている。

引用・参考文献

- Liisa Kaisto, Sari Muhonen, Salla Peltola 『MUSIIKIN mestarit 1 - 2』OTAVA社 2008
- Juha Haapaniemi, Elina Kivelä, Mika Mali, Virve Romppanen 『MUSIIKIN mestarit 3 - 4』OTAVA社 2009
- The Finnish National Board of Education 『The National Core Curriculum for Basic Education』2004
- 福田誠治『こうすれば日本も学力日本一 フィンランドから本物の教育を考える』朝日新聞出版 2011
- 波田野 亘『フィンランド語日本語 辞典』2010
- 佐藤 学・澤野由紀子・北村友人『未来への学力と日本の教育 揺れる世界の学力マップ』明石書店 2010
- 鈴木 誠 他5名『フィンランドの理科教育 高度な学びと教員養成』明石書店 2008
- 小原光一 他12名『小学生の音楽5』『小学生の音楽6』教育芸術社 2010
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社 2008
- 文部科学省『中学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社 2008

文末資料 表1 2つの学年群に大別したナショナル・コア・カリキュラム

<p><小学校第1学年～第4学年> 楽しく、総合的な音楽活動 (integrating activity) を展開することにより、音楽表現力を開発することが中心となる。様々な音の世界と音楽を経験させ、自己表現を促し、自分自身の考えを具体化するよう促す。</p> <p>指導の目標 * 自分達の声を無理なく活用し、個人及び集団での歌唱、器楽演奏及び身体反応により、表現することを学ぶ。 * 音環境と音楽を集中し、かつ、積極的に聴き、観察する (observe) ことを学ぶ。 * 作曲の要素として、様々な音楽を形づけている要素を使うことを学ぶ。 * 音楽の世界の多様性を理解することを学ぶ。 * 音楽を作るグループの一員として、音楽の聴き手として、責任を持って行動することを学ぶ。</p> <p>主たる指導内容 * 児童の発達段階に応じた (age-appropriate) 歌唱ゲーム：発話、言葉遊び (talking nonsense)、及び歌唱による練習 * 歌唱曲：声部に分かれて歌唱できるような練習 * 器楽演奏曲及びその練習：身体を使った楽器、リズム楽器、旋律楽器、及び和声的な楽器 (harmonic instruments) 及び、一緒に演奏できるようになるための準備をする。練習では、まず、基本的なリズム感を開発すること。 * 一人ひとりが経験や発想を説明するなど、様々な活性化の手段を用いて、色々な音楽を聴くこと。 * 音の反復、小規模な作曲 (sound composition) 及び即興による作曲活動。 * 自分自身、あるいは小さなグループの中で音楽を奏で、聴く、身体反応する、及び作曲することに関連して、音楽を形づけている要素—リズム、主旋律、和声、強弱、音色や形式—に関する基本的な概念。 * 異なった時代や音楽のジャンルを網羅する、フィンランドの音楽及びその他の国々、文化の音楽を紹介する。歌唱、器楽による楽曲、聴く楽曲。</p> <p>第4学年終了時に達成が好ましい活動 * 発声方法を理解し、声を合わせて歌唱できる。 * 楽曲の基本的なリズムをとることができ、器楽演奏に参加でき、一緒に演奏できる。 * 歌唱曲を習熟し、その一部を暗譜で歌うことができる楽曲がある。 * 個人として、集団の一員として、音、身体反応、リズムやもしくは旋律を使いながら、独自の音楽的な解決 (musical solutions) —例えば、繰り返し (in echo)、問いと答え、ソロもしくはトウツェリ(一人で、もしくはみんな)での練習、—を発見できる。 * 耳から入ってくる音楽を認識し、音楽を聴いた経験を、言葉、イメージもしくは身体反応で表現できる。 * 自分自身、あるいは小さなグループの中で音楽を奏でるグループの一員として、他のメンバーのことを助産しながら、どのように行動すべきかを理解している。</p>	<p><第5学年～第9学年> 音楽の世界と音楽の経験进行分析し、音楽を聴いたり、自分自身、あるいは小さなグループの中で音楽を奏でている際に、音楽の概念、及び楽譜を活用したりすることを学ぶ。</p> <p>指導の目標 * 自分自身、あるいは小さなグループの中で音楽を奏でているグループの一員として行動するなかで、様々な音楽表現の領域における能力を維持・向上させる。 * 様々な音環境を批判的に検討・評価すること、並びに、音楽の様々なジャンルやスタイルに関する知識を広げ、深めることを学ぶ。 * 音楽の形成における音楽を形づけている要素—リズム、旋律、和音、強弱、音調及び形式—の役割を理解する。さらに、音楽の当該要素を表現する概念や楽譜を活用すること学ぶ。 * 作曲を通して、音楽及び音楽表現の可能性における創造性を構築する。</p> <p>主たる指導内容 * 発声の制御及び表現を開発する練習：様々な形態やジャンルを代表する独唱及び齊唱曲。一部、暗譜で歌唱する。 * 器楽を合奏するスキルを開発する練習：様々な音楽文化及び形態を代表する器楽楽曲。 * 多様な音楽を多様に聴き、それらの時代、地域性及び文化を分析。 * 音、歌唱曲、楽器、身体反応及び音楽技術等を活用して、即興、作曲及び編曲に際して、一人一人の音楽的な発想の試み。</p> <p>成績8を獲得するための最終評価基準 * 合唱に参加し、主旋律を追い、正しいリズムでの歌うことができる。 * 個人として、リズム楽器、旋律楽器、もしくは、和声的な楽器を演奏する基本的なテクニックを習熟し、合奏ができる。 * 音楽を聴き、それを鑑賞し、聴いた音楽について、理にかなった意見を表明できる。 * 自らの音楽、及び他者が創作した音楽の双方を聴く方法を理解している。この結果、他者と一緒に音楽を奏でることができる。 * 異なったジャンルの音楽及び異なった時代や文化の音楽を認識し、区別することができる。 * 主要なフィンランドの音楽及び音楽的な生活を知っている。 * 音楽を奏でること、音楽を聴くことの結びつきを音楽概念を活用できる。 * 自らの音楽の発想及び考え方を開発・実現するにあたり、音楽を形づけている要素を構成要素として、活用することができる。</p>
--	--

文末資料 表6 『MUSIIKIN mestarit 5－6』目次

MUSIIKIN mestarit 5-6 <音楽の達人5-6>」OTAVA社		
HYVIÄ FIILIKSIÄ いい気分	Kesäloma- ja koulunaloitustunnelmia, hyvän tuulen lauluja 夏休みと始業の雰囲気、楽しい気分の歌 Koulusoittimet 学校にある楽器	4
OMILLA JUURILLA あなたの源 (フィンランド人のルーツ)	Uutta ja vanhaa kansanmusiikkia Suomesta 新旧のフィンランド民族音楽 Kantelekoulu カンテレ学校	32
MATKAMUISTOJA 旅行の思い出	Rytmejä ja säveliä maailmalta 世界からのリズムやメロディ Eksoottisia tunnelmia ja tanssia エキゾチックな雰囲気や踊り Djembekoulu ジェンベ学校	58
RADIO SOI ラジオが鳴り響く	Menomusaa 楽しくてアップテンポの曲 Mummoradio おばあちゃんのラジオ Tsemppikanava がんばれチャンネル Suomirokkia フィンランドのロック	Kehorytmejä ja musiikkikilikuttaa tarttuvien biisien tahdiss 90曲のリズムにあわせた身体リズムやミュージックエクササイズ Suomalaista iskelmää ja huumoria フィンランドのヒット曲やユーモア
AIKOJEN TAKAA 遠い昔から	Taidemusiikkia keskiajasta romantiikkaan soittaen, laulaen, kuunnellen 演奏や、歌うことや鑑賞を通して、中世からロマン派へのクラシック音楽 Nokkahuilukoulu リコーダー学校	126
LET'S ROCK ! さあロックをやろう！	Bändikoulu バンド学校 Materiaalia bändisoittoon バンド演奏のための教材 Rokin mestareita eri vuosikymmeniltä 各年代のロックの達人	Kitara, basso, rummut ja koskettimet ギター、ベース、ドラム、そしてキーボード
ESIRIPPU AUKEAA 幕が開く	Unohtumattomia sävelmiä oopperasta, musikaaleista, elokuvista ja TV-sarjoista オペラやミュージカルや映画やテレビのシリーズから、忘れられない旋律	188
LAULUN TAIKAA 歌の魔法	Ääniharjoituksista moniäänisyyteen 発声練習からポリフォニーへ ohjelmistoa moneen käyttöön いろいろ使えるプログラム Joululauluja クリスマスの歌	202
ORKESTERI VIREESSÄ 調子合わせたオーケストラ	Sinfoniaorkesterin soittimet 交響楽団の楽器	252
MUSIIKIN AVAIMET 音楽のキーワード(資料)	Musiikin teoriaa kerraten ja syventäen 反復したり深めたりしながらの音楽理論	256

(ABSTRACT)

Music Education in Finland II: Study of the Music Curriculum for Primary School Education 3

TAHARA Masako

Drawing from three previous studies, this study verifies the characteristics of Finnish music education from two perspectives: first, on the basis of the how the national core curriculum for basic music education develops through the first 9 years of school and, second, on an analysis of the contents of a textbook for grades 5 and 6.

In addition to the features of the previous studies, music education in Finland leads students to develop self-confidence through music, understand their roles in a group, learn how to act appropriately in different situations, and learn about Finland, the world and history. It also helps to establish the growth of a national and cultural identity as well as internationalism. The textbook aims to establish self-confidence through music expression such as playing and composing music. The textbook not only introduces students to the notion of expressing themselves with their own music, but also to achieving musical knowledge and the skill of expression.